

新美南吉「ごんぎつね」の研究

井 上 修 治 近 藤 章

Study of Nankichi Niimi 「Gongitsune」

Syuji Inoue Akira Kondo

豊岡短期大学 論集

第 13 号 別 冊

平成 28 年 12 月 20 日 発 行

新美南吉「ごんぎつね」の研究

Study of Nankichi Niimi 「Gongitsune」

井 上 修 治

Syuji Inoue

近 藤 章

Akira Kondo

はじめに

「ごんぎつね」が国語教科書に取りあげられてから今年60年の節目に当たる。最初に取りあげたのは大日本図書で1956年(昭和31)のことである。以後東京書籍、光村図書と順に掲載し、1977年(昭和52)には、光村図書、教育出版、日本書籍、東京書籍の4社が取りあげている。また、1989年(平成元)からはすべての教科書で「ごんぎつね」を取りあげている。子・父母・祖父母と3世代にわたって、「ごんぎつね」を学習していることになる。

「権狐」は、1931(昭和6年)、18歳のときに「赤い鳥」1月号に掲載された。南吉が県立半田中学校を卒業し半田第二尋常小学校の代用教員をしているとき、子どもたちに「権狐」を語って聞かせたお話である。翌年「赤い鳥」に掲載された「権狐」の原稿は、主宰者である鈴木三重吉によって手を入れられたといわれている。平成27年度の採択の教科書には「ごんぎつね」以外「てぶくろを買いに」(三省堂3年)「あめ玉」(光村図書5年)が掲載されており、過去には、「赤いろうそく」(教育出版2年)、「きょ年の木」(教育出版)「おじいさんのランプ」(大日本図書・東京書籍6年)など南吉作品は教科書に掲載されている。

「ごんぎつね」がこれほど長く、多くの教科書に掲載され子どもたちに愛されるのか、南吉の魅力にふれ、「ごんぎつね」に込められた願いを考察する。

新美南吉について

新美南吉は、愛知県知多半島の東海岸にある半田町(現・半田市)に大正2年7月30日、生まれた。4歳で母を失い、8歳の時、母方の新美家の養子となる。養家では、血のつながらない祖母と二人きりで寂しい幼年期を過ごす。

昭和6年、愛知県立半田中学校を卒業後、岡崎師範学校を受験したが体格検査で不合格となる。受験に失敗した南吉は、小学校の時の担任、伊藤仲治先生や竹内校長に相談する。二人の計らいで、母

校の半田第二尋常小学校の代用教員を勤める。17歳の南吉は、この時「ごん狐」を作り子どもたちに実際に語って聞かせた。

昭和7年4月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）英語部文科に入学する。南吉の幼年童話は50編ある。その内の約30編は東京外国語学校4年生の昭和10年5月に書かれた。

昭和13年東京外国語学校を卒業する。富山の中学校に内定していたが、軍事教練の単位が取れず教員免許の取得ができず赴任しなかった。結核の再発によって4年半の東京生活を終え、南吉は昭和11年1月に帰郷する。失恋・発病・失業という人生最悪の時期を経て、昭和13年に県立安城高等女学校に就職する。ここでも、中学校時代の恩師遠藤慎一らの働きかけがあった。安城高等女学校で、南吉の赴任とともに入学した13歳の少女たち（19回生）を卒業までの4年間担任し、熱心に日記指導をした。美しい自然と素朴な人々に詩を見い出しながら創作を続け、昭和18年3月22日、喉頭結核のため29歳7ヶ月の短い生涯を閉じた。

「ごんぎつね」および他の南吉作品の特色

南吉が書いた日記・ノートは、小学校3年の「綴方帳」から「昭和16・17年ノート」の中に日々の思いを記している。

1. 理想の母親像を追って

南吉は、4歳の時実母を亡くしている。実母は病弱で南吉がもの心つくころには、既に伏せていたため、抱かれたり、おんぶされたり、添い寝をされたりする経験がなかった。8歳の時には、母の実家に養子に出されている。環境の変化や養母（祖母）との生活の中で、心から甘えられなかった。詩「天国」でおかあさんの背中を次のように書いている。

「天国」

おかあさんたちは

みんな一つの天国をもっています。

どのおかあさんも

どのおかあさんももっています。

それはやさしい背中です。どのおかあさんの背中でも

赤ちゃんが眠ったことがありました。

背中はあっちこっちにゆれました。

こどもたちは おかあさんの背中を

ほんとの天国だとおもっていました。

おかあさんたちはみんな一つの天国をもっています。¹⁾

「ごんぎつね」の悲劇のきっかけは、兵十のおっかあの死である。兵十は、どっと水かさが増した川で腰まで水につかりながらおっかあのために、うなぎをとろうとした。しかし、自分のいたずらのせいで、兵十のおっかあにうなぎを食べさせなかったとごんは後悔する。おっかあが死んだ今、兵十は自分と同じ境遇になってしまった。「おれと同じ一人ぼっちの兵十か。」と、限りない共感をもつ。「おっかあ」「食べたい」「うなぎ」「おれと同じ」「ひとりぼっち」が、いわしを投げ込む償いの行為を生む。人間は孤独であり、一人一人がその悲しみを背負って生きているのだと考えていた南吉にとって、母と子を結ぶ絆は、求めても得られない憧れであったに違いない。

2. 孤独と疎外 相容れないものと対峙して

「ほんとうにもものわかった人間は、俺は正しいぞというような顔をしてはいないものである。自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識していて、そのためにいくぶん悲しげな色がきつと顔にあらわれているものである。」²⁾ と、「正しい」「不正な」のように、南吉の作品には、相容れないものとどう対峙していくのかを主題としたものが多い。

- ・ごんぎつね (人間と動物)
- ・手ぶくろを買いに (人間と動物)
- ・張紅倫 (日本人と外国人)
- ・巨男の話 (魔界と人間界)
- ・花のき村と盗人たち (善人と悪人)
- ・牛をつないだ椿 (善人と悪人)
- ・おじいさんのランプ (古い時代と新しい時代)

南吉が相反する価値を書き続けた背景として、恵まれなかった生活環境と健康面の不安がある。

南吉は、大正15年4月に半田中学校に入学するが、小さな畳屋の子どもが中学校に入学することは当時異例のことだった。中学校では首席争いをするほど優秀であった。そして、高等学校への進学を希望していたが、経済的な負担をかけたくないとの思いで断念する。

余の一生の運命は定まった。小学校教員で余は一生を了するのか。余の理想は大芸術家だったのだ。²⁾

(昭和4年1月25日)

苦学してでも、大学に行きたい!²⁾

(昭和4年4月3日)

名誉などいらない。このままこの海を見下ろす美しい小学校で教員をしていられたらとつくづく思うことがある。²⁾

(昭和12年5月10日)

また、肉親者の早死や筆記試験さえ受験できずに不合格となった健康面の不安等を従姉妹の結婚式に出席した後の日記に次のように書いている。

死ぬのは嫌だ。生きていたい。本が読みたい。創作がしたい。 ²⁾	(昭和8年12月6日)
酒宴がたけなわとなる頃私は彼等無知な男達から一種の圧迫を感じた。私は彼等の逞しい肉体を羨ましいと思った。そして彼等こそ本当の人間であるように思えた。では私は何だろう。私は一種のひこばえの如きものかも知れない。しかも不幸なことに生活力のないひこばえが人一倍思考力を持っているのだ。 ²⁾	(昭和10年3月14日)

この恵まれなかった生活環境と健康面の不安は、南吉に孤独と疎外を生む。これらと立ち向かい、南吉は「何でもゆるすこと。何でもうけ入れること」²⁾(昭和17年7月4日)という境地に入る。さらに、喜びと悲しみついて、「よのつねの喜びかなしみのかなたに、ひとしれぬ美しいものあることをしているかなしみ。そのかなしみを生涯うたいつづけた」²⁾(昭和17年7月10日)と記している。

ごんは、身寄りがなく孤独であった。その寂しさを紛らわすため、いたずらを始めたのだろう。ごんはいたずらをしたのではなく、誰かに近づきたいといたずらをしていたにちがいない。人間同士なら、どうしていたずらばかりするのかと言葉による意思疎通を行うことも可能である。「いつか兵十が分かってくれる。」と償うごんとごんの変化に気づかない兵十。きつねと人間はコミュニケーションを図ることができない。

「おじいさんのランプ」では、巳之助少年が、町で「花のようにあかるいガラスのランプ」を目にする。巳之助の住む村ではまだランプを灯す家などなかったため、彼には初め、それがなんなのかわからない。暗い夜をあかるくさせようつくしいものに巳之助は心奪われ、彼はランプ屋として身をたてる。時は流れ、町には電気がひかれた。そして村にもやってくることになる。受け入れがたい思いであるが、時の流れは止めることができない。電気はあの日の巳之助のランプそのものなのだから。

南吉の相反するものへの姿勢は、「イエス・ノー」、「善・悪」・「幸・不幸」と結論づけるのではなく、葛藤した末、なぜそうなったのか原因を突き詰めようとする。そして、「ああそうなのか」とその背景を追究し納得し、人間は必ずよい方向に進むものだ確信する。

南吉の描く登場人物は、ストーリーの進行とともに心の変質をとげていく。南吉にとっての登場人物は、「人間とは何か」を問う格好の材料であり、かれらの行動や心理を追うことで、人間の中に潜む孤独やエゴを発見する。これは、南吉の自画像が投影している。

「ごんぎつね」では、兵十の母が亡くなってから、償いを始めるごんの気持ちの変化を丁寧に書いている。 *出典 光村図書 小学校国語科用 4年下 「ごんぎつね」

①「兵十のおっかあは、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。(中略) ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」
--



②「おれと同じ一人ぼっちの兵十か。」



③兵十のうちのうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かってかけもどりました。



④ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。



⑤ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十はいわし屋にぶんぐられて、あんなきずまでつけられたのか。



⑥ごんは、こう思いながら、そっと物置の方へ回って、その入り口にくりを置いて帰りました。



⑦次の日も、その次の日も、ごんはくりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました。
その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本持っていきました。

①はいたずらの後悔であるが、「ちょっ」と舌打ちしている姿から深い反省は感じられない。葬式の日、しおれた兵十を見かける。そして、②のようにたまたま聞こえたいわし売りのいわしを投げこんで④のように「まず一つ、いいことをした」と思う。⑤の傷に気づく前にくりをひろってきたのだから、「まず一つ、いいこと」といわしを投げこむぐらいでは、ごんの気が済まなかった。くりは「投げこむ」のではなく「置いて」、「穴に向かってかけもどりました」のではなく、「かえりました」から、自分のいたずらが取り返しのつかないような大変なことだったこと、兵十に申し訳なく思うようになったことが読み取れる。⑦「次の日も、その次の日も、その次の日は松たけも二、三本持っていきました」と償いをする。「持ってきてやりました」「持っていきました」の違いからもごんの気持ちの変化が読み取れる。お念仏がすむまで井戸のそばでしゃがんで待つごん、兵十のかげぼうしをふみふみついていくごんの姿はいじらしい。ごんの気持ちは償いを通して分かり合いたいと願うようになっている。

「ごんぎつね」の結末は悲劇である。「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなぎきました。」は残酷である。しかし、同時に「ごんよかったね」と読者がほっとする場面でもある。最後の場面は、ごんから兵十に視点を移し、兵十の気持ちの変化を描いている。償いを通して徐々に変わっているごんに対して、兵十の気持ちは瞬時に変わり、ごんの気持ちを理解する。

①こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。



②「ようし。」



③兵十は、立ち上がって、納屋にかけてある火なわじゅうをとって、火薬をつめました。



④そして、足音をしのばせて近づいて、今、戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。



⑤兵十はかけよってきました。



⑥家の中を見ると土間に粟がかためてあるのが目につきました。



⑦「おや。」兵十は、びっくりしてごんに目をおとしました。



⑧「ごん、おまいだったのか。いつもくりをくれたのは。」



⑨兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としました。

①から⑤まで、兵十の行動は迷いが無い。⑥でごんとくりが結びつき、「おや」と自分の行動に気づく。ぐったりと目をつぶったままうなずくごんに、とんでもないことをした後悔する。そして、火なわじゅうをばたりと、取り落とすのである。この時、お互いの気持ちが通じ合ったように感じることができる。孤独感、疎外感がなくなった瞬間である。命をかけてまで、分かり合いたいと思ったごんが哀しい。

3. 郷土性と民謡調

近頃はこんなありふれた身近なものを美しいと思うようになった。ごく平凡な百姓達でもよく見ていれば誰もが書いた事のないような新しい性格をもっており、彼等の会話にはどの詩人もうたわなかった面白い詩がある。²⁾ (昭和12年2月4日)

また、南吉は、日記に「ぼくはどんなに有名になり、どんなに金があるようになって、華族や都会のインテリや有閑マダムの出してくる小説を書こうと思ってはならない。」²⁾ (昭和15年12月26日)と記している。この時期の作品では、どこにでも見られる典型的な農村を舞台にして、どこにでも起こりうるような身近な事件や出来事が語られている。

「ごんぎつね」では、中山さまというおとのさまは中山勝時がモデルであり、半田市岩滑にお城があったと言われている。大正時代まで中山の近くの権現山にぎつねが住んでいたそうである。「村の小川の堤」は半田市岩滑新田の北を流れる矢勝川、「お宮」は八幡神社に対応している。

また、日本のどこにでも見られたようなのどかな原風景が描写されている。

しだのいっばいしげった森 菜種がらのほしてある もずの声 お菌黒 お宮にのほり
こしに手ぬぐい 表のかまど 村の墓地 六地藏さん ひがん花
白い着物を着たそうれつものたち 白いかみしも

これらの描写は、「むかし、むかし、あるところに」で始まる昔話のように、子どもたちをお話の世界に引き込む働きを持っている。屋根瓦にあたる光の反射、彼岸花の咲いているあぜ道、葬式の風景など、「ごんぎつね」の郷土性が強いのは、南吉が半田第2尋常小学校の代用教員をしていたとき子どもたちに語って聞かせたことによるものである。また、就職、進学で援助をしてもらった恩師や支えてもらった郷土への愛着のためである。

4. 子どもの心理の描写と視点の移動

子どもの内なる視点から見た世界の描写が、的確で鋭い。読者はかつての生活経験が呼び起こされて、思わず「なるほど」と共感を覚える。たとえば、「耳」という作品で、いつも友達に大きい耳をいじられていた花市君が、あるとき「いやだよ」とはっきりした声で拒絶し、子ども達は呆然とする。

このように、子ども同士のやり取りの中で、突然相手がまるで別人のように見えるという場面が作品によくでてくる。これは、子どものかわりやすさ、うつろいやすさを敏感にキャッチできる子どものナイーブな心性をあらわしている。

「ごんぎつね」は、小学校国語4年の全教科書に採用されている。小学生も中学年になると、「何でもできるぞ」と行動的になってくる。自我心が芽生え今まで柔順だった子が、反発したり、強く自己主張したりする。また、この時期は急に仲間を求め、友だちづき合いもさまざまな集団に属する喜びやルールも身につけていき、体と心の発達に個人差や男女差はあっても確実に成長する時期である。「天使の心」と「悪魔の心」こどもたちはこの2つの心の間を揺れながら成長する時期である。自分のいたずらのせいでお母の最後の頼みを果たせなかった「悪魔の心」と、せめてもと償いをする「天使の心」ごんの2つの心を子どもたちは、自分のこととしてとらえることができる。いたずらばかりしている自分の言動は、兵十の目を通して知ることもしできる。さらに、第3者はどう考えているのかを劇的な結末から理解することもできる。中学年の子どもにとって自分とは何かを考えるきっかけとなる。

「ごんぎつね」に潜む南吉の願い

1. なぜ「ごん」と呼びかけたのか

「ごん」の名前は、半田市の近くにある権現山（南吉が子どもの頃、この辺りにキツネが住んでいた）に由来している。では、野生のきつねになぜ名前をつけたのだろうか。「ごんぎつね」では、兵十がごんに向かってかけた言葉がある。1つは、1の場面のうなぎの頭を口にくわえた時「うわあつ、ぬすっときつねめ。」、もう一つは、6の場面のクライマックス、火縄銃でドンと撃った後「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」の2箇所である。

ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりがかためて置いてあるのが、目につきました。

「おや。」

と、兵十はびっくりして、ごんに目に落としました。

「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

権狐は、ぐったりなったまま、うれしくなりました。 (出典 草稿 「権狐」)

この会話文の前後でごんの気持ちが兵十に通じた劇的な変化がある。ごんが追い求めていたのは、兵十との気持ちの通じ合いである。

南吉の草稿では、「うれしくなりました。」とごんの気持ちを書いている。鈴木三重吉は「うなずく」という動作に修正し、余韻を残した。この時、ごんは兵十との意思の疎通が図れたと感じた。「ごん、おまいだったのか」には、ごんに許しを請い、謝りたいという兵十の思いがある。それは、南吉自身が追い求めた孤独、疎外からの脱出でもあった。

2 鈴木三重吉による「ごんぎつね」の修正

鈴木三重吉は、大正7年童話雑誌『赤い鳥』を創刊し、児童文学の発展に尽くした。いったん休刊し、昭和6年に復刊した『赤い鳥』に童話、童謡を投稿し、翌年昭和7年1月号に「ごん狐」は掲載された。三重吉は、「スパルタノートの草稿」に、原稿用紙2枚強の削除と2枚弱の加筆、110箇所もの修正と大幅に書き換えている。特に大きな修正部分は、前述の結末部分と前文の簡略化である。前文は、茂助爺が茂平になり、どのようなおじいさんだったかという説明が削除されている。

また、「いささき」を「しだ」に「はそれ」を「鍋」にと半田地方の方言を標準語に修正したり、擬態語や擬音語を一般的な表現に改めたりした。文中の「権狐」を「ごん」とし、親しみやすい表現にした。

鈴木三重吉にとって新しい才能の作品を広く紹介したいという願いがあったはずである。修正された「ごんぎつね」はごんへの共感やクライマックスの悲劇、設定は草稿「権狐」のままである。「ごんぎつね」が再び活字となったのは、昭和18年の第3童話集『花の木村の盗人たち』である。この童話集のために南吉が用意したのは、草稿「権狐」ではなく『赤い鳥』に掲載された「ごん狐」であった。南吉自身も修正したものを自分の作品と認めている。

なお、現在使用されている教科書では、「兵十」を「ひょうじゅう」と読ませているが、昭和52年改定の教科書には、「へいじゅう」と読ませていたものもあった。これは、当時の当用漢字や漢字教育のためだと言われている。草稿「権狐」、『赤い鳥』「ごん狐」教科書「ごんぎつね」を読み比べると、90年以上にわたって愛されてきた作品であることが分かる。

おわりに

いま、社会のあらゆる階層で、「コミュニケーション能力」という言葉が使われている。国際社会を生き抜く異文化コミュニケーション能力、社会に出てから最初に直面する世代間コミュニケーションの問題を克服する能力、そして、楽しい学校生活を送るための人間関係を形成していく能力。多様なコミュニケーション能力は、いずれもこれからの時代を生きる子どもたちにとっての基礎的な能力である。

文部科学省は、平成16年2月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語教育」の中で「言葉や文字などによって、意思や感情などを伝え合いコミュニケーションを成立させることは、国語の最も基本的な役割である。その意味で、国語は個人が社会の中で生きていく上に欠くことのできない役割を担っている。」³⁾とコミュニケーション能力の基盤を成す国語教育の役割を述べている。

「どう?」「うん、大丈夫。」と、こんな会話が成り立つのは、病気をしたり、仕事が忙しかったりとかお互いが共通の知識を持っていて、それを前提として「順調に回復している」「仕事の目途がついた」という内容だと理解できるからだ。相手との共通の経験、基盤がないとコミュニケーションを取ることができない。

言葉によるコミュニケーションは、共通の基盤を持つことや知識があることは必要な要素であるが、最も重要なのは理解しようとする心である。理解しようとする心があって、はじめて言葉によるコミュニケーション可能となる。

10月から12月にかけて全国の小学校4年生は、国語の時間「ごんぎつね」を学習する。南吉の願いは、孤独と疎外からの脱出である。「ごんぎつね」の学習を通して、新美南吉の「ごんぎつね」にかける思いが伝わることを願う。

引用文献

引用文献

- 1) 新美南吉記念館 『生誕百年 新美南吉』 p13 97 2015.7
- 2) 新美南吉記念館 『生誕百年 新美南吉』 p96 97 2015.7
- 3) 文化審議会答申 「これからの時代に求められる国語力」 I 第2 2002.2

参考文献

- 新美南吉記念館編集・発行 『生誕百年 新美南吉』 2015.7
 鶴田清司：『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』 明拓出版 2005.2
 沢田保彦：『南吉の遺した宝物』 一粒出版 2013.3
 生野金三：『改稿 新美南吉研究—ごん狐の世界—』 萌文書林 2014.5

